【第三日】10/25(日)

【決勝】　開始 09:00　終了 11:23　所要　２時間23分　【審判】藤山、小山、法村、辻

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計	打席	打数	安打	打点	盗塁	盗塁死	犠打	犠飛	四死球	三振	残塁	併殺	失策
株式会社　十八親和銀行	0	0	0	0	0	2	0	0	1		3	40	32	8	3	0	1	3	0	5	8	10	0	1
三菱重工長崎	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	34	34	6	0	0	0	0	0	0	2	7	0	2

株式会社　親和銀行			一	二	三	四	五	六	七	八	九
⑨	鹿田　海斗	25	5FF		6-3		3-1E	←2-6T	K		左安
⑥	山口　優大	26	3FF		左越二		4F		8F		K
⑦	磯　祐一郎	30	右越三		K			B	K		2-5
③	北田　亮佑	32	K		ＤＢ			投犠打		ＤＢ	K
④	大竹　紘人	26		6-3	3A			二内安		捕犠打	
②	高坂　幸靖	29		左安		4-3		ＤＢ		4-3	
⑤	高井　航平	28		投犠打		2F		B		8F	
①	岡部慎太郎	29		右安		k		5-3			左越本
1	東川　賢輔	35									
⑨	貫　亮介	25		6-3			5L	K			中安

その他の登録選手　(監督)内山大輔㉟、西郷龍太郎㉛、堤祐一郎㉚、栗山和高㉙　森内麟太郎㉔、小川優介㉔

三菱重工長崎			一	二	三	四	五	六	七	八	九
⑥	原　征一郎	30	6F		3-1			8F		1-5	
③	稲澤　和也	28	6-3			K		4-3		左安	
⑤	上杉　真行	27	7F			7F		8F		5F	
⑧	吉原　貴大	28		3FF		6FE			5-3	3FF	
②	坂田　竜徳	29		右越二		5-3			3FF		4-3
④	山﨑　真治	35		3F			5FF		二内安		5L
⑨	梅井　翔太	20		K			1F		1-3		7F
⑦	中山　圭介	21			3A		…				
H7	大山　駿	25			…		左安			左安	
①	宇土慎太郎	24			４Ｆ		２Ｆ				
1	山口　宰	31								遊内安	

その他の登録選手　(監督)富岡壮馬㉙、中村勉㊷、若松大樹㊲、永松孝広㉜　山口泰樹㉙、甲斐翼㉔

十八親和銀行は三回までに毎回得点圏に走者を置いたが効果打が出なかった。初回は二死後に磯の右越え三塁打。二回は高坂、岡部が安打の二死一三塁。三回にも一死後に山口の左越え二塁打など５走者が塁上に残った。六回に先頭四球から犠打二進と二塁内野安打に死球の満塁に、高井の四球で押し出し。続く岡部の三ゴロで三走の大竹が還り２得点。最終の九回は先頭の岡部がライナー左翼越えの１１０m弾で追加し、貫と鹿田の連打で無死一二塁と攻め立てたが、中軸に後続が無かった。

三菱重工長崎の得点機は二回一死後に坂田の右越え二塁打と、八回には先頭の大山と七回からマウンドの山口が連安打。投ゴロ三封で走者が代った後に稲澤の左安打で一死満塁。だが後続の中軸が連続の内野飛に抑えらると、九回二死まで投じた岡部と、最後はチーム最年長の東川から無四球に仕留められ、無得点に終わった。

個人賞は、最高殊勲選手賞にあたる『平井清光賞』を投打にわたる殊勲の岡部慎太郎が優秀投手賞とダブル受賞。優秀選手賞に山口優大。三菱重工長崎の山﨑真治が敢闘賞を受けた。

株式会社 十八親和銀行は10月１日に十八銀行と親和銀行が合併し、それまでは親和銀行のチーム名で昭和39年第14回大会（第３回から第15回大会までは準硬式球使用）に初出場すると、昭和51年第26回大会で三度目の決勝戦進出し初優勝。その後、昭和60年からの大会３連覇を経て、平成元年から６年までと、平成21年から26年までの二度、大会６連覇を達成。現在は平成28年から令和２年まで大会５連覇中である。

今回の優勝で29回目となるが、三菱重工長崎との決勝戦は昭和42年が最初で今回が19回目。対戦成績は親和銀行が15勝４敗。

５年連続29回目優勝の『株式会社　十八親和銀行』は、新型コロナウィルスの影響により開催が危ぶまれたが、約１カ月半遅らせて10月30日から岡山県倉敷市周辺で開催の『天皇賜杯第75回全日本軟式野球大会』に３年連続29回目の長崎県代表で参加する。同大会では昭和53年と平成30年の二度、ベスト４進出が最上位である。

５年連続29回目の大会優勝した

株式会社　十八親和銀行

３年連続17回目の大会準優勝の

三菱重工長崎

【決勝、十八親和銀行―三菱重工長崎】8回⅔を無失点と好投して平井清光賞に輝いた十八親和銀行の岡部＝諫早市第1野球場

長崎新聞
10月26日12面より

〝全国デビュー〟へ 勢いづく勝利

エース岡部が最優秀選手賞

ハイライト

「十八親和」銀行として連覇を5に伸ばした。これまでの緑ではなく、ピンクの企業カラーをアクセントにした新ユニホームでの初陣。1951（昭和26）年から数えて70回目の記念大会で、その名をしっかりとアピールした。30日からは〝全国デビュー〟の天皇賜杯全日本大会も控えており、内山監督は「勢いづけた」とうなずいた。

メンバーは従来の旧親和組で編制。コロナ禍で練習回数を減らしたり、複数の班に分けたり、満足な調整ができない時期もあったが、攻守で堅実な試合運びを見せた。

攻撃面は投手戦を予想して「（出塁したら）リードを大きく取って、けん制を投げさせて相手を疲れさせる」（内山監督）を徹底。六回に初めてもらった四球を足掛かりに2点を奪った。

守ってはエース岡部が「いい調整ができている証拠」と、スライダーやチェンジアップを巧みに織り交ぜて8回⅔を無失点。九回には「そこしか打てない」と苦笑いしながらも、内角直球を左翼席へ運んだ。文句なしの平井清光賞（最高殊勲選手賞）受賞だった。

九回2死からは今季で引退する35歳の東川がマウンドへ。岡部が「先輩たちが頑張ってきてくれたから今がある」と感謝する右腕が、きっちりと左飛で締めくくった。

チームは29日、天皇賜杯の舞台となる岡山入りする。岡部は「一つ一つのプレーにこだわりたい。その積み重ねが勝ちにつながる」と闘志を燃やしていた。（石田慶介）

『平井清光賞』

昭和61（1986）年に渡辺源・長崎県軟式野球連盟初代理事長の逝去により、翌年に二代目理事長に平井清光(きよみつ)が就任。

氏は昭和27(1952)年に長崎新聞社入社。報道記者として国体や甲子園高校野球大会などの取材を重ね、スポーツ報道の基盤を確立。膨大な記録の収集や保存に努め、後年は編集委員として『熱球の青春譜』『長崎県スポーツ史』の長期連載を執筆し新聞紙上に連載。

連載後は『長崎県スポーツ史』を昭和63(1988)年に、『長崎県高等学校野球史=白球50年』を平成10(1998)年に出版。また平成７年には全日本軟式野球連盟の九州地区理事で、『全日本軟式野球連盟50年史』の編集委員として執筆・編集にも携わった。

長崎新聞社記者として取材していたのが縁で、昭和34(1959)年の長崎市民早朝野球協会設立にかかわり、49年には長崎市軟式野球連盟理事長兼長崎市民早朝野球協会理事長の要職に就任。

昭和62(1987)年に県連盟理事長就任後も、早朝野球協会理事長職を勤続し、約半年間に及ぶ早朝野球期間中は毎朝４時半起床。自宅も当時の会場だった通称・大橋球場の近くに建てた。

県連盟理事長として21年間、早朝野球理事長は平成18(2006)年まで務めたが、健康上の理由により退任。翌平成19年２月21日に肝臓ガンにより73歳で逝去。翌20年の『長崎市民早朝野球50回大会』や、平成22年の『県軟式野球選手権60回大会』を、ネット裏から見ることはできなかった。

長崎県軟式野球連盟では氏の生前の野球に対する功績を称えて、『県軟式野球選手権大会』で授与する最高殊勲選手賞に『平井清光賞』を、第60回記念大会から制定している。

氏は長崎県体育協会の理事も務め、2003年(平成15年)秋の叙勲で『旭日双光章』(没後に従六位)を受賞している。